

兵庫県立コウノトリの郷公園開園20周年記念

げんきくん物語

海をわたったコウノトリの大冒険

読書感想文コンクール受賞作品



中学生の部

兵庫県知事賞

「コウノトリの舞う空」

雲南市立大東中学校二年 山本 真芳

僕が小学生の頃、テニスに通う途中の電柱に見たこともない物を発見した。もっさりとしていて、木でできた、巣のようなものだった。

「何だろう？」

それが、コウノトリの巣だということは、もう少し後になつてから知ることになった。

「雲南市に、コウノトリが営巣している。地元の新聞やニュースで、あの巣がコウノトリの巣ということを知ったが、そもそも僕はコウノトリというものを知らなかった。どういふ鳥なのかという事を調べる前に、僕は週二でその鳥を見ることになった。

巣の上には、だいたい二羽いるように見えた。テニスが終わって帰るときには、一羽のこともあった。

「つかい鳥だな。」

それが率直な感想だった。でも、少しずつ見るのが楽しみになつていった。

僕が一番、コウノトリに興味を持つ原因になったのが、春のある日の、その一瞬の出来事だった。見なれていた巣の上に、小さな小さな頭が二つ見えたのだ。

「ヒナがいる！」

ニュースでヒナがかえつたことは知っていたが、見えたのは初めてだった。それから見るのが楽しみで、待ち遠しくなつた。四羽いること。順調に育つていること。自然での産卵が、徳島県に続いて二例目だったこと。そして、それがとてもすごい事だと、同時に知つて、とてもうれしかった。自分のこんな身近なことまで、すごいことが起きていくのだと興奮した。

このまま大きく育っていくのを見守つていくのだと思つていた矢先に、僕が見たのは夕方のニュースだった。

「雲南市のコウノトリのメスが誤射された。」なんで？みんな知つていたはずだ。ニュースや新聞でとり上げていたのに。撃たれたつてだれに？そんな思いがぐるぐる何回もおそつてきたが、一番心配だったのは、残されたヒナとお父さん鳥のことだった。これから先どうなるんだろう。ちゃんと育つんだろうか。そんな思いで残されたコウノトリたちを見ていく事になる。

それらを見るのは、悲しかった。お母さんを待つているのかな、死んだ事を知っているのかな、見るのが楽しみだった巣が、悲しくて、悲しくて、涙が出た。雲南市に來なければ、こんなことにならなかつたのに。自分の住んでいる市が嫌いになつた。

豊岡市にある、兵庫県立コウノトリの郷公園に保護されると聞いたときは、心の底からうれしかった。そこはプロの居る場所だ、ヒナたちも、ちゃんと育ててもらえる。お父さん鳥の事も心配だったけど、ヒナたちが育たない事も心配だったから。ヒナ四羽を救護した、とニュースで知つた数日後、だれも居ない巣の上に立つているお父さん鳥を見てまた涙が出た。人間のせいでゴメン。雲南市のせいでゴメン。帰つてきちゃだめだ。豊岡に行くんだ！それが安全だし、子どももそこに居るよ。そう伝えたかった。届かないけれど。

山岸哲園長、という名前に覚えがあった。「げんきくん物語」お父さん鳥の名前だ。僕はその本をすぐ手に取つた。そこには、小学生の頃の僕が見ていた、あのときのげんきくん達の話が書かれていた。

書かれていたことは、僕が思つていた以上に、沢山の人が見守つていたという現実だった。雲南市も、島根県立三瓶自然館サヒメルも、中国電力も、JRも、市民も出来る限りの支援をしていた。みんなが見守つていたので起きてしまった事だつたと知つた。

山岸園長、こう書いている。

「コウノトリの死因が人間生活に原因があるものは、少なくとも四十五・五パーセントにもなる。」

二〇〇五年の試験放鳥以降、野外でくらすコウノトリは増加しているけど、防獣ネットにからまつたり、鉄塔や電線に衝突したりする事故も激増しているらしい。げんきくんの子どものげんちゃんも、発泡ゴムの誤食で死んでいる。今のこの世の中は、コウノトリと人間が共存していくには色々な問題がある様だ。

海のマイクロプラスチック問題も人間が原因だ。海が汚れているのだから、川も同じことがいえるだろう。人間の生活は、自然界の生き物にとっては、毒にしかない。

今年の夏休みに念願の、兵庫県立コウノトリの郷公園に行つてきた。そこは、僕の住んでいる雲南市とあまり変わらない風景だった。コウノトリが、住める土地を作る。当たり前前の事が難しい。雲南市に、僕に出来ますか？二十羽以上のコウノトリが飛ぶ空を見て、この空は雲南市につながっているんだ、と思つた。

兵庫県教育長賞

「人とコウノトリ達をもつと共生する豊岡に」

近畿大学附属豊岡中学校一年 安田 高祐

豊岡市はコウノトリの町、そう言つても過言ではない。僕はコウノトリとこの豊岡が大好きだ。コウノトリの郷公園には毎週のように通つていて、コウノトリや、他に僕の好きな昆虫の事を学んでいる。それと、僕はコウノトリKIDSクラブというクラブに入つていて、今年で四年目となる。そのコウノトリKI

DSでは、島根県に行った。そこで、げんきくとポンス二のペアの話を、雲南市立西小学校の校長先生に話してもらって、げんきくんの事をもっと知りたい！と思い、この本を読んだ。僕がなぜげんきくんに興味を持ったのかというと、げんきくとポンス二のペアが、雲南市立西小学校の人工巣塔に飛来したからだ。

雲南市立西小学校では、巣塔を建てたが、飛来するか分からない。そこで、コウノトリが巣材を取りやすいよう、裏山から、子ども達が一人一本、巣塔のすぐ下に枝を持つてくる「二人二枝運動」を行った。校長先生がそう話してくれた時、僕は、本当に飛来するのか？と疑問だった。だが、子ども達の思いが届いたのか、げんきくとポンス二のペアは飛来した。奇跡的だとすごく感動した。これが興味を持ったきっかけである。

運命的か偶然か、とにかく奇跡的な事は他にもあった。それは、げんきくんがポンス二と出会った事である。げんきくんは、韓国まで飛び、そこにはポンス二も飛来していた。げんきくんがその時に、ポンス二の事を知っていたのかは分からない。だが、二羽とも韓国飛来し、その後日本でペアになった。こんな偶然があるのだろうか。

この二つの事例で、げんきくとポンス二のペアは、何か運命的なものを持つているのでは。そう感じた。

げんきくんは生まれ方も運命的だった。従来のコウノトリと違う生まれ方をした。托卵である。托卵だけでは運命的とはいわない。では何が運命的か。それは、托卵した卵を、福井県の飼育施設まで二百キロメートル移動させるという事だ。これは、卵が死んでしまうかも知れない。だが、卵は無事だった。こんなにも奇跡的な事が続くのはすごい。僕は、この事でさらに感動した。

だが、この物語は、感動した事だけでなく、落胆した出来事もあった。それは、まだ人とコウノトリが共生しきれていない、という事だ。まず、福井県に飛来したくちばしの折れたコウノトリ「武生」だ。くちばしが折れた原因は、「トラバサミ」に挟まれたのかも知れないという事だった。僕は最近、この「トラバサミ」に挟まれたコウノトリを見た。それは、戸島巢塔の幼鳥J0246だ。中指を挟まれ、いかに痛そうだった。戸島湿地の佐竹節夫さんに、状況を説明してもらった。「トラバサミ」は、許可無しでは使用できない猟器具だ。だが、店で簡単に手に入るそう。したがって、許可無しで使用されている事が多いそうだ。僕は、それを聞いた時、すごく残念だった。この作文で、皆さんに「トラバサミ」の事を知って

もらい、「トラバサミ」が店で簡単に手に入る事について考えて欲しい。

J0246の事件の前にも「トラバサミ」に挟まれたコウノトリは何羽かいるのだ。もし「武生」が「トラバサミ」に挟まれたのなら、「トラバサミ」の教訓が全く生かされていない事になる。僕はその事で落胆した。

次に落胆した出来事は、「ななちゃん」が、猟銃で誤射された事件だ。事件自体は仕方がない。だが事件を受けて、ネット上でハンターへの非難が炎上した事である。ハンターだって人間だ。だから誤射もする。大事な事は、人間によるコウノトリの被害をどう防ぐか。それを考えて欲しかった。それを考えずにハンターを非難したって、「ななちゃん」はもう帰ってこないのだから。

今回、この本では、感動した事もあり、落胆した事もあった。だが、この本で考えた事、それは、「今後人とコウノトリはどう共生すればよいか」だ。だから、この作文の題名は、「人とコウノトリ達もつと共生する豊岡に」にした。コウノトリだけと共生はできない。したがって、自然環境や他の生物という意味で「達」も加えた。

今、日本には、百羽を超すコウノトリが、悠々と飛んでいる。人々は野生復帰は終わった、と思っているのではないだろうか。人々の関心が薄れて、また昔のようにコウノトリ達の住みにくい環境、例えば農薬をたくさん使う田んぼなどができたらまたコウノトリは絶滅してしまう。もう終わったのではなく、まだこれからだ、という思いがないといけない。この作文の最初に「豊岡市コウノトリの町、そういつても過言ではない。」と書いたが、そういう事が過言になってしまう日が来てしまうかも知れないのだ。

「げんきくん物語」を読んでもらい、コウノトリ野生復帰について人々に考えて欲しい。

兵庫県立コウノトリの郷公園長賞

「コウノトリと共に生きる」

前橋市立第一中学校一年

新池谷 悠

この物語の主人公である「げんきくん」は、絶滅危惧種であるコウノトリだ。コウノトリは、一度日本から姿を消したこ

とがある。その原因は、乱獲や営巣場所の消滅、農業使用による餌場の減少などだ。人間が自分の住みやすい世界にしたために、コウノトリの生活の場がうばわれて絶滅してしまったのだ。人間は、生き物を助けたりもするが、絶滅に追いやりたりする不思議な生き物だと思った。人間には、思いやりと自分勝手な気持ちの両方があるから、このようになるのだろうか。

しかし、農業使用やそれに伴う川や海の汚染により困ったのは、人間も同じだった。公害により多くの人の命がうばわれた。また、森林を破壊したことで、地球温暖化が進んだり、土砂崩れが起こっている。結局、動物が絶滅するような環境は、人間にも悪い環境で、動物が住みつく環境は、人間にとっても住みやすいのだと思う。

げんきくんは、島根県雲南市大東町に、奥さんである「ななちゃん」と一緒に巣を作った。子育てに選んだこの場所は、良い環境なのだろう。そして、お父さんになったげんきくんは、ヒナの世話が大変だと思うけれど、幸せだったと思う。お父さんとしてのやりがいを感じていたように思うし、何より家族での暮らしが楽しそうに描かれていたからだ。

しかし、ある日、ななちゃんがサギとまちがえられ、鉄砲で撃たれて死んでしまった。いつもは帰ってくる時間にななちゃんも帰ってこない事を、げんきくんはどう思っただろう。心配になり、探しに行きたかったと、私は思う。そのような状況でも、げんきくんは、一人で子育てを続けた。ヒナを大切に育てるげんきくんの責任感の強さに、私は感動した。

だが、げんきくんだけでヒナを育てることは難しいと判断され、ヒナは人間に保護されてしまう。ななちゃんだけでなく、ヒナまでいなくなってしまうのだ。私は大切に想っていたうさぎが死んだ時、悲しくて、たくさん泣いたが、周りに支えられて、悲しみを受け止めることができた。しかし、げんきくんには支えてくれる仲間がいない。この状況を、げんきくんは、どのように「一人」で受け止めたのか。私は、ヒナよりもげんきくんの事が心配でたまらなかつた。

保護されたヒナは、コウノトリの郷公園で育てられた。飼育員さんは、ヒナに対応する時、防護服で全身真っ白になり、手に持ったペットをくちばしの代わりにするなど、コウノトリになりきって、えさをあげていた。それにより、ヒナはえさを食べるのに時間がかからなくなつたそう。ヒナは、げんきくんやななちゃんだと思つたのかな。きちんと親のことを覚えているヒナは、「二人」のことが大好きだったのだと思った。本当の親に育ててもらえたら、よかつたのかな。しかし、げんきく

んの子供が大切にされていることが分かり、私はとても安心した。そして、このことをげんきくんに伝えられたら、どんなによかったかとも思った。

げんきくんの子供達四羽は、七十八日齢で放鳥された。しかし、げんきくんの息子げんちゃん、約八十四センチもある発泡ゴムをへじかウナギと誤って飲みこみ、死んでしまう。この死は、人間の責任だ。人間がこみをきちんと処理しないから、このようになってしまったのだと思う。現在においても人間はコウノトリを守っているけれど、このような形で傷付けてもいるのだ。そして、私は、げんちゃんを殺したこのプラスチックごみは、いずれ人間にも害を及ぼすことになると思う。このごみは、今、きちんと処理されず、海に大量に流れ込んでいる。また、それは、月日が経つと、マイクロプラスチックという五ミリメートル以下の小さなプラスチックに変わり、それを魚が餌と間違つて食べることがある。そして、その魚は、私達が食べるかもしれない。マイクロプラスチックには、汚染物質が付着しているため、人体に害が及ぶかもしれないと言われている。もしそうだとすると、人間が処理しなかったごみは、私達の身体にも害を与えることになるだろう。だから、そうなる前に対策をとることが大切だと思う。一度壊れてしまった環境を取り戻すのは大変だ。しかし、コウノトリや地球上のすべての生き物のために、少しずつ対策をしていけば、地球を守ることもできると思う。

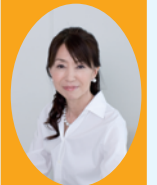
げんきくんは、その後、子供達と再会したり、新しい奥さんもできて幸せに暮らしている。私は、げんきくん達が住みやすいと思える場所を増やしていきたいと思う。また、私は、獣医師となり、動物を守ることが夢だ。

私は、げんきくんのような強い心を持っていない。いやな事があると、逃げだしたくなる。しかし、この本を読んで、げんきくんのように、どんな困難も受け止めて、乗り越えられたい人になりたい、と思うようになった。げんきくん、ありがとう。



選評

作家・兵庫県教育委員
審査委員長 玉岡 かおる



『人とコウノトリとが共生できる未来へ』

読書は、知らない世界をぐんぐん自分の領土にしていく「ココロの活動」だ。人ごとのような知識や情報をふやすことじゃない。その意味で、みんなが書いてくれた感想文には、ちゃんと、他の誰でもない自分の思いが書かれていて、感心させられた。

たとえば兵庫県知事賞に輝いた山本真芳君の作品。鳥取県雲南市に住んでいるから、先にコウノトリを見ていたんだね。「雛がいる！」という発見。それは本の中だけでは実感できない衝撃だっただろう。そこから本を読んで詳しく知って、さらには豊岡に行つてもっと深く学ぶ。興味が次々に行動につながっていくのは、まさに、読書の醍醐味だ。

兵庫県教育長賞の安田高祐君もそう。豊岡に住んでいるからこそ、ふだんから地元の方々の努力を知っていただろうし、コウノトリKIDSクラブに入つて活動するほど関心も高かったんだろう。それだけに、野生復帰がもう終わつていると思われているのではないかという心配が強く響いた。

そして兵庫県立コウノトリ公園長賞の新池谷悠さんは、遠い群馬県前橋市からの応募。野生で生きるコウノトリたちが、人間が原因でまだまだ苦勞していることに思いをはせた。その優しさにはかけがえがない。どの作品も、コウノトリを通じて地球の環境にまで考えを広げている。えらいね。みんなが大人になる未来、きつとコウノトリも人間もすこやかに暮らしている、そんな世界が実現されていたらと願う。その第一歩が、きつとこの本から始まるのだ。

選評

絵本・児童文学作家
審査委員 キム・ファン



中学生の部は文学性に重きを置きました。自分自身の言葉で深めるだけでなく、いかに読む者の心に共感や感動を与えられているか？ 総合的に審査しました。

県知事賞に輝いた山本君の作品は、たまたま、げんきくんなちなちゃんが作った巣と出会い、ヒナの誕生をよるこんでいたところ、なちなちゃんが誤射されるニュースに接します。「雲南市に來なければ、こんなことにはならなかったのに：」「コウノトリが住める土地を作る。雲南市に、僕にできますか？」。現実に対する鋭い心の葛藤が効果的に使われていて、読む者の心を打ちました。

県教育長賞を受賞した安田君の作品には、わたしたちも知らなかった島根県で行われた巣材を集める、「一人一枝運動」が紹介されましたし、トラバサミなどの例をあげながら「野生復帰は終わった。と思つているのではないだろうか」と問題提起しています。

郷公園長賞の新池谷さんの作品では、げんきくんが家族を思う父親として情感豊かに表現されていて、「げんきくんのように、どんな困難も受け止めて、乗り越えられる人になりたい：げんきくん、ありがとう」と結び、心が温かくなりました。

このように受賞者のみなさんの作品はどれも、読む者に共感と感動を与えられる素晴らしい文章でした。受賞者のみなさん、おめでとうございます！